様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００６７４

研究課題名（和文）イディオムの不変から可変への規則性解明の記述的研究

研究課題名（英文）Descriptive research on clarifying the systematization of idiom change

研究代表者
井上　亜依（Inoue, Ai）

東洋大学・経済学部・教授

研究者番号：７０４４１８８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「イディオムの不変から可変の規則」を明らかにし、様々な領域で使用されるイディオムに適応可能かどうかを明らかにしました。この成果は、国内外の学会及 び専門雑誌で発表し、一定の評価を得るだけでなく肯定的なフィードバックを得ることができました。 次に、「この研究成果を教育に還元する」という考えに基づき、英語学習の際に必須のツールである学習者用英和辞典にどのように記述すればよいかということに取り組みました。本研究は、研究を教育に還元するという考えのもと、どのように新しい言語の現象の1つであるフレーズ変化をどのように辞書に記述すれば日本人英語学習者にとって有益かを提案しました。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で明らかにした「変化しないと考えられてきたイディオムの変化とその規則の解明」は、時事刻々と変化する現代英語の姿を忠実にしています。この研究成果は、英語学習の際に必須のツールとなる辞書のイディオム記述充実に役に立ちます。学習者用英和辞典は、長い歴史があり充実した記述となっていますが、イディオムを含むフレーズ（2語以上から成り立つ語連結）の記述については、量的・質的な改善が求められています。そこで本研究で明らかにしたフレーズの実態を辞書に忠実に反映することで、日本人英語学習者の英語力向上に貢献できることに意義があります。

研究成果の概要（英文）：This research clarified the 'invariant to variable rules for idioms' and whether they can be adapted to idioms used in various domains. The results were presented at domestic and international conferences and in professional journals, where they not only received a certain amount of recognition but also positive feedback. Next, based on the idea of 'returning the results of this research to education', I worked on how to describe it in an English-Japanese dictionary for learners, which is an essential tool when learning English. Based on the idea of giving research back to education, this study proposed how phrase change, one of the phenomena of the new language, could be described in the dictionary in a way that would be beneficial to Japanese learners of English.

研究分野：英語学、英語定型表現研究

キーワード：英語定型表現研究　イディオム　意味論　形態論　英語辞書学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究に取り組み始めた当初は、世界中で行われている不変と考えられてきたイディオムの可変を取り扱った研究を探すことから着手しました。様々な先行研究を調べた結果、どの先行研究もイディオムの可変を紹介しているに過ぎず、なぜそのような可変が起きるのかという言語現象についての論理的及び体系的な先行研究は存在しませんでした。そこで、イディオム変化のついて種々の先行研究をまとめることにより、本研究で何をどこまで取り組むのかを明確にし、研究の目的を明確にしました。

２．研究の目的

本研究の目的は、語結合（フレーズ）の一種で「不変」と考えられてきたイディオムの変化の提示と、その変化の規則性をつまびらかにする「イディオムの不変から可変を明示する体系的研究」により、イディオム研究の発展に貢献することです。例えば、pull strings（コネを利用する）のように全体の意味が各語の意味を合わせ た「糸を引く」とならず、各語が他の語に代用できない語結合（＝イディオム）が、同じ意味の draw strings に変化する事象を指します。 この目的を達成するための具体的な研究内容は、次の 3 点です。①誰もが利用できる電子言語資料収集体（コーパス）を用いて、変化形イディオムの統語的・意 味的・音声的特徴を調べ、「イディオムは変化する」ことを明らかにする。②①で扱った変化形イディオムが、イディオムかどうかをイディオム性（イディオム であるかどうかを判断する指標）を用いて明らかにする。③①と②で扱った様々な変化形イディオムの実態調査の結果より、イディオム変化の規則性を見出し、 新しく観察される変化形イディオムの成立に学術的説明を与える。

研究初年度(2020 年度)は、不変と理解されてきたイディオムの変化を、電子言語資料収集体から得られたデータをもとに、量的・質的（統語的、意味的、音声的特徴）観点 から捉えた。そして、その変化の規則を解明します。

研究 2 年目(2021 年度)は、初年度に明らかにしたイディオム可変への規則性を、国内・国際学会及び国際的なジャーナルを活用して世界に向けて発信することを目的としました。

研究 3 年目である最終年度（2022 年度）は、これまで明らかにした「イディオムの不変から可変への規則性」の適応性を目的とし、様々な領域で使用されるイディオム変異を検証することで、その規則性の適応性を述べました。

３．研究の方法

様々な先行研究を渉猟することで、イディオムのどこがどのように変化するのかという仮説を立てました。その仮説が正しいかどうかを検証するために、誰もが利用できる大規模な電子化された言語資料収集体（コーパス）を使用しました。その結果、コーパスで仮説が正しいとわかったのち、新しいイディオム変異の実態をコーパスを使用して明らかにしました。このような研究手法を様々な領域で観察されるイディオムに応用し、イディオム変異の実態を述べました。その後、本研究の目的である「イディオムの不変から可変への規則性」を明らかにしました。

４．研究成果

研究初年度(2020 年度)は、不変と理解されてきたイディオムの変化を、電子言語資料収集体から得られたデータをもとに、量的・質的（統語的、意味的、音声的特徴）観点 から捉えました。そして、その変化の規則を解明しました。この研究成果を、国内外の学会や専門雑誌で発表・投稿を行うことで、世界中のイディオム研究者からアドバイスをもらい研究を進めました。

研究 2 年目は、初年度に明らかにしたイディオム可変への規則性を、国内・国際学会及び国際的なジャーナルを活用して世界に向けて発信をしました。その結果、肯定的なフィードバックを得るだけでなく一定の評価をも得ることができました。また、コロナ禍で海外の大学や研究機関で資料収集を行うことは今年度も叶わなかったが、国内で集中して資料収集ができ、当初の研究計画を大きく逸脱することなく研究を進めることができました。具体的には、研究 2 年目は下記のことを行いました。前述した学会発表及び論文発表で得られたフィードバックと資料収集をもとに、初年度に明らかにしたイディオ ム可変への規則性をあらゆる側面から再考しました。詳細を述べると、これまで扱ったものとは異なる様々なタイプのイディオムを研究対象とし、そのイディオム変 化の実態を膨大な電子化された言語資料を利用して明らかにしました。このような研究活動を通して、初年度に述べた暫定的なイディオム可変への規則性の妥当性を検証し、その規則性を確固たるものにしました。この研究成果は、次年度の総括となる研究につながるものとなりました。

また 2 年目は、上記に述べた英語学の視点からの研究成果を発表するだけでなく、「研究を教育に還元する」という考えのもと、国内外の教育関連の学会での口 頭発表や依頼講演を行いました。具体的には、日本人英語学習者が英語学習の際に必ず使用するであろう学習者用辞典にどのようにイディオム変化の記述をすれば、 現代英語に起きているありのままの姿を忠実に反映できるかどうかという教育学的応用を考えました。そして、イディオムをどのように日本人英語

学習者に教えると効果的であるかという提案をも行いました。この応用と提案は、次年度の研究成果をどのように英語教育へ繋げれば良いのかという一助となりました。

研究最終年度は、前年度までに明らかにした「イディオムの不変から可変の規則」が、様々な領使用されるイディオムに適応可能かどうかを検証しました。その結果、「イディオムの不変から可変の規則」は現在のところ、適応可能ということを明らかにしました。この成果は、国内外の学会及び専門雑誌で発表し、一定の評価を得るだけでなく肯定的なフィードバックを得ることができました。次に、「この研究成果を教育に還元する」という考えに基づき、英語学習の際に必須のツールである学習者用英和辞典にどのように記述すればよいかということ に取り組みました。学習者用英和辞典は、英単語の記述は充実していますかが、イディオムを含むフレーズの記述は、現代英語の実態を正確に反映していると言えません。それ以前に、フレーズへの理解や解釈が、正しくないことが散見されます。そこで本研究は、学習者用英和辞典のフレーズの分類から見直し、どのようにフレーズ記述をすれば日本人英語学習者にとって有益かを提案しました。このように、本研究は英語定型表現研究と英語辞書学の橋渡しの試みを行いました。 本研究は、当初の研究計画を着実に遂行し一定の成果を収めることかができました。今後は、この研究課題を著書にすることで、世界に向けて研究発信を行いま す。それだけでなく、この研究課題を通して、次に英語定型表現研究が取り組むべき課題も明確になり、引き続き研究活動を発展させることが可能となりました。

この 3 年の研究により明らかにした「イディオムの不変から可変への規則性」は現在のところ、どのイディオム変異に適応可能なので、この研究成果を書籍として出版し、世界に発信します。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Ai Inoue	４．巻 1
２．論文標題 English-Japanese dictionaries for learners: Phraseological problems and proposed solutions	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Lexicography and Language Documentation	６．最初と最後の頁 14-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ai Inoue	４．巻 50
２．論文標題 A lexical priming's analysis of semantically similar group prepositions in formal English	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Lexicon	６．最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 井上亜依	４．巻 0
２．論文標題 心理的距離と抽象度による代名詞の使い分けが及ぼす影響ー人を表すthey who, these who, those whoの場合ー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 英語実証研究の最前線	６．最初と最後の頁 33-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ai Inoue	４．巻 10
２．論文標題 Corpus pattern analysis of of-construction phrase transformations to the genitive	５．発行年 2020年
３．雑誌名 International Journal of English Linguistics	６．最初と最後の頁 118-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5539/ijel.v10n6p118	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　2件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 井上亜依
２．発表標題 英語辞書学関連学会のお知らせ
３．学会等名 大学英語教育学会英語辞書研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ai Inoue
２．発表標題 Are idioms arbitrarily changing? A large-scale corpora investigation
３．学会等名 The 6th International Society for the Linguistics of English（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ai Inoue
２．発表標題 English-Japanese dictionaries for learners: Their phraseological problems and proposed solutions
３．学会等名 The 14th International Conference of the Asian Association for Lexicography（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ai Inoue
２．発表標題 A large-scale corpora investigation into English idiom variants in the domain of anger
３．学会等名 European Society of Phraseology 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ai Inoue
２．発表標題 Translanguaging and phrase-based practices in English language education for Japanese college students
３．学会等名 Beyond Multilingualism - Translanguaging in Eduation（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 井上亜依
２．発表標題 イディオムの可変への規則性
３．学会等名 関西英語語法文法研究会第42回例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 井上亜依
２．発表標題 英語定型表現研究：概観・問題・実践
３．学会等名 大学英語教育学会英語辞書研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 井上亜依
２．発表標題 英語教育への一提案ーフレイジオロジーを活用した「英語らしさ」の獲得
３．学会等名 日本英語コミュニケーション学会第29回年次大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

1．著者名 Howard Jackson (ed.)	4．発行年 2022年
2．出版社 Bloomsbury	5．総ページ数 512
3．書名 The Bloomsbury Handbook of Lexicography	

1．著者名 八木克正・神崎高明・梅咲敦子・友繁義典（編）	4．発行年 2020年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 217
3．書名 英語実証研究の最前線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関